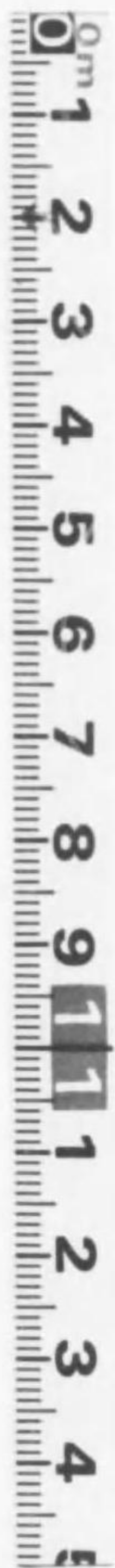


傳藤原佐理の肋切三

301  
10

帙入



始





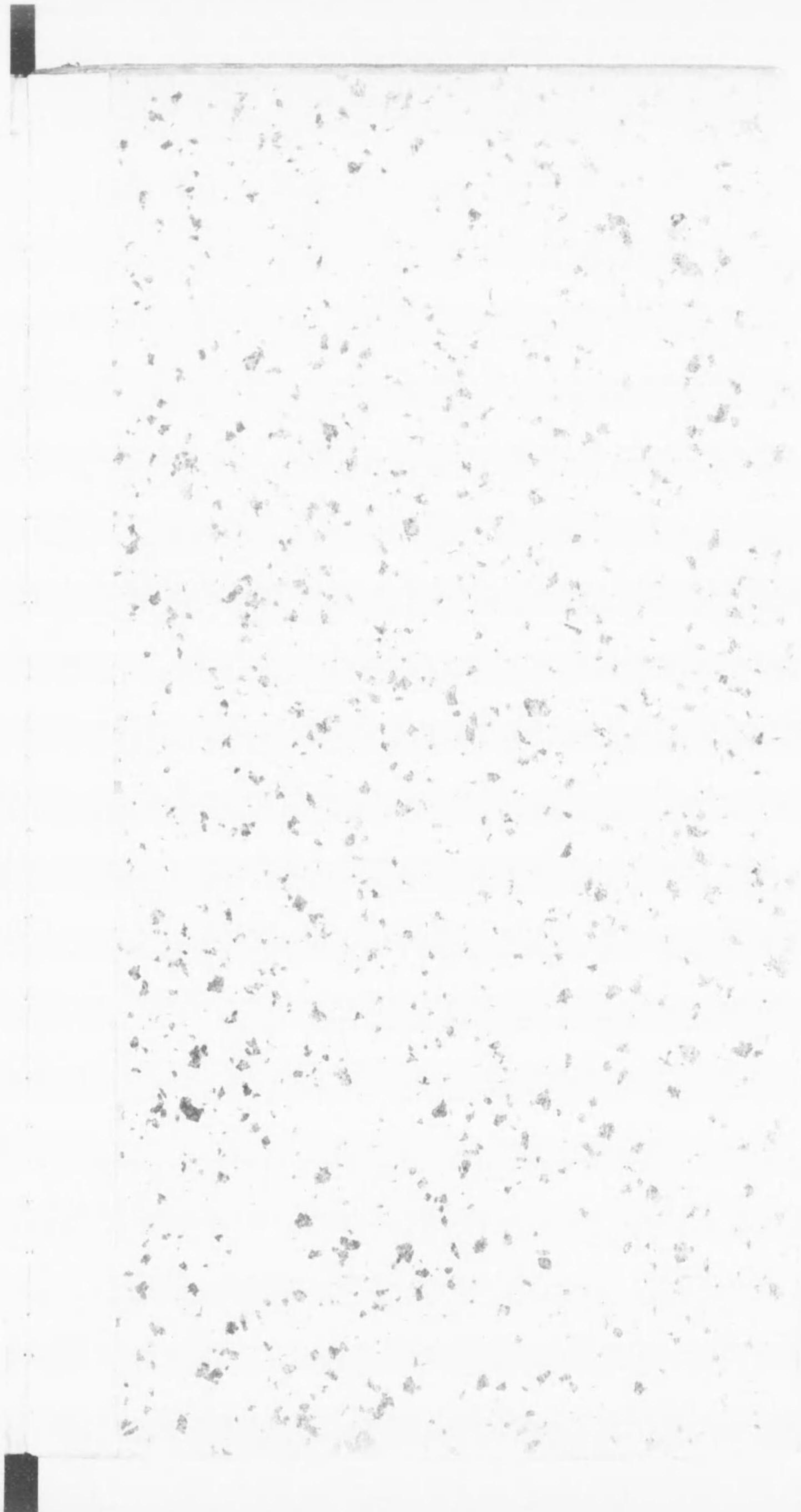
301  
10

傳藤原佐理書

筋切

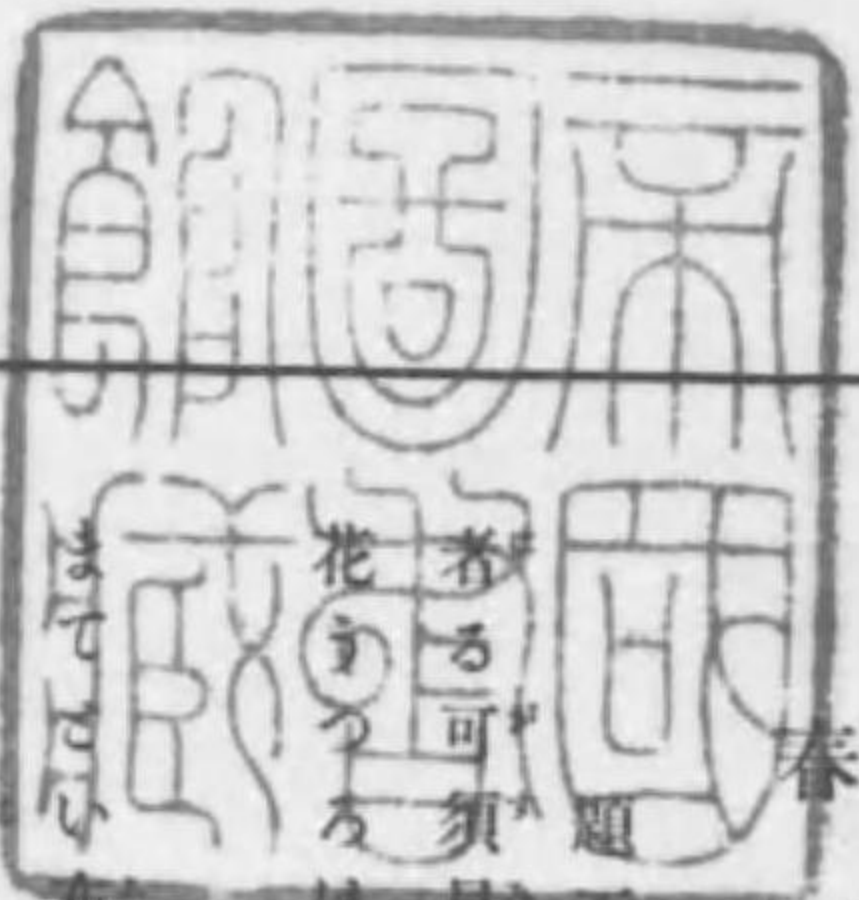
釋文

三





古今和歌集 弓第二



春下

題不知

讀人しら須

者る可須見たな飛九やま能さ久ら  
花うつろはむとや以ろ可八利ゆ具

素性

らばな爾を散くら爾於もひまさ万し  
農こ利なくちるぞめでた支さ久ら花  
悪支てよのな可はて能う个れ八  
このさごに多び年しぬべしさくら者那



ちるとま可ふにいへちわ春れて  
うつ世三のよにも爾たる可佐久ら花  
さ久と美るまに可つち利二個利  
僧正遍照爾讀て於く利个る

惟喬親王 號小野宮

佐久ら者奈ちらば千らなん千ら須とて  
不留さご人の起て毛み那久に

雲林院の櫻のち利个る乎みて

承均法師

散久らちる花のところは、流な可ら

ゆき曾不利つゝ起え可て爾須る

櫻花のち利ける乎よ免る

素性法師

者那千ら須可せのやどりは多禮可し流王  
禮爾をしへよ行てうら三無

雲林院さ久らの花を讀个る

承均法師

いざ久ら王れも千里南比登散可利阿  
利なば非とにう起めみえな無

あ飛しれり遣る人のまうできて  
能ち爾花爾佐してつ可はし希る

貫之

非とひみし支美もや久るとさくら花

今日者待見無てちらば千ら南

山乃さ久ら耳 清原深養父 内匠允

はる可須見な爾可久須らんさ久ら花



ちるま越多爾も美るべ支もの乎

心地曾こなひて惱介る時風爾阿

たらじとて於ろしこ免ての見

侍利介るあ悲多爾さ介る花のち利

可多爾なりに希る乎みてよみ侍

利介る 典侍因香直平時歌

垂籠て春の行へ毛志らぬ間爾待し

櫻毛うつろひ二介理

佐久らの者那の水爾ち利希る

乎みて 貫 之

ゆ久水爾風の吹意るさ久ら花きゑ

數な可類雪可と曾みる

東宮能雅院二て櫻花のち利て

み可は水爾な可れ介るをみてよ  
免る 菅野高世

盈多よ利も惡堂にち利二し花なれ者

於ちても水のあはとこ曾なれ

散くらのとくちるをよめる

貫 之

故登ならば散可すや者阿らぬさ久ら花

美る爾和れさへ志都こゝろなし

さ久らのごとくとくちる毛のは

なしと人の以飛介れ者

さくら者な東久ち利ぬとも於も本え須

人のこゝろ曾可勢も不支阿へぬ

さ久らの花のちる乎讀る



躬 恒  
ゆ支との三布る堂にある乎さくら花い可二  
ちれと可風の不久らん

友 則  
飛散可堂のひ可利能ど个支者るの日二  
志づこゝろなく花のちるらん

春宮帶刀陣爾て櫻花のちる  
を讀める 藤原好風

者る可世は花能あ多利をよ起て不个  
心づ可らやうつ呂ふと美無

比叡爾の本利て花を見侍利て  
よ免る 貫 之

やまた可みつゝわ可こしさ久ら花

風者こゝろ二末可須べらな利

仁和御時中將の御息所能家歌  
あは世に讀る

大伴黒主

春早雨の布るはなみ堂可櫻花  
ちる乎志まぬ人しなけれ者

亭子院歌合爾

貫 之

散久ら花ち利ぬる風のなご利に者  
美づ那支會らにな三會多ち个る

寧樂帝御歌

不るさ登ゝな利二しならの都二も  
いろは可はらで花者さ支个利



春歌として讀る

良岑宗貞

者那の意ろは霞爾こ免てみ世須  
と裳可を多爾ぬ須め春の山可世

寛平御時后宮哥合二

素性法師

花の木毛今者堀殖じ春多てば  
うつろふ以ろ二人ならひ个理

題しら須

讀人しら須

はるの意ろ能以多利い多らぬさとは  
あらし散个る佐可る花の美ゆらん

春歌としてよ免る

貫之

みわ山をし可毛可久須可春霞人爾し  
羅れぬ者那やさ久らん

雲林院の御子の許爾花見爾

北山乃邊爾罷个る爾讀る

素性法師

いざ个ふは春能山邊爾末どひな無久禮な  
者那个能者那の可个可者

はるの歌としてよ免る

同人

伊都末で可能べ爾こゝろ能あ久可れて  
花者那しちら須者千よ毛へぬべし

題しら須

讀人しら須

者るごとに花能散可利八あ利なめど阿



非みむ事は以のちの見な里  
ふ久可せ爾あつらへ徒くる毛のならば  
この悲ともとはよ今とい者万し  
者那のごとよのつ年ならばすぐしてし  
む可しはま堂も可へ利支な万し  
万つひとつもこぬも能ゆる爾うぐひ春の  
な支つる者那を、利て今る可那

寛平御時歌合爾

藤原興風

さ久はなはち久さ那可らにあ多なれど  
誰可は春をうらみ者てたる  
はる可須見意ろ能ち久佐爾美ひ  
鶴は堂那悲く山の者那可げ可裳

霞多つ者るの やまべはとほ今れど楚る 在原元方  
月可个裳花もひごつに美遊る夜  
半大虚を佐へ乎羅無東所  
有都婁布花をみて

見つね  
は那みれ者 いろるさへこ曾うつ利今る  
題不知 いろ爾はいでじ人毛こそ忘れ 読人不知

有具非春の那なく能べごとనికిて  
美れ者うつろ布花爾風曾吹今る  
布く可勢をな支てうらみようぐひ  
春は王れや者那爾て多爾ふれたる

藤原菅根



ちるはな能なく二し東万る物なら八  
わ禮う久ひ春爾於とら萬しや者  
仁和御時中將御息所の家爾歌  
合世无とし今る時讀る

藤原俊蔭藏人左馬助

者那のちる事やわ日し起者る可須  
美多つ多の山能うぐひ寸のこゑ  
鶯のなくを

素性法師

舌づ多へばおの可は可世爾千流花を  
誰爾於本せてうぐひ春のな具なくらんとも  
鶯の木爾なくを

凡沙内躬恒

新しるしなき年を毛もなく可那かうぐひ春  
乃のことしの三みちる花なら那なく爾に

題不知 讀人不知

駒並て以散美に行む古里のは  
雪との三みこ曾花はちるら免ひ

此歌或人のい者く前大政大臣のとなん

ちる者那をな爾可うらみむ世中爾  
我可身もと毛爾あらん物可者

小野小町

花の色はうつ利二け利ない多づらにわ可  
みよに不る那可めせしまに

仁和御時中將の御息所の家爾  
歌合世んとし今る時爾



素性法師

惜と於もふこゝろ裳いとによら禮な無  
ちる者なごとにぬ支てとゞめむ

志賀能山越爾をむなの於本久

あへ利けるに讀てつかはしける

梓弓入るの山べをこ盈くれ者道毛さ

利阿へ春花曾ふ里け果

寛平御時歌合の歌

同人

者るの、爾春菜つ万むとこしわれ者

ち利可不者那爾みちは万可ひぬ

山寺爾詣多利个る夜讀る

やど利して者るの山べ爾ね多る夜者ゆめ

農うち爾も者那曾ち利个る

寛平御時后宮御歌合作者可尋

時 文不入此目錄

吹風と谷の水としな可利世ばみやま

可くれの花をみましや

志賀よ利還个る女どもの華山二

い利て藤の花能もごに多ちよ

利て可へ利个る爾讀て送个

類 僧正遍照

餘曾二みてかへら死人二布地の花

盤る末つはれよ盈多はをるごも

家爾藤花の左支多る越人の多地

よ理てみ个れ者



わ可<sup>が</sup>やどにさ希<sup>け</sup>る不<sup>ふ</sup>ち那<sup>な</sup>三<sup>み</sup>たち可<sup>か</sup>へ利<sup>り</sup>  
數<sup>す</sup>支<sup>ち</sup>可<sup>か</sup>て爾<sup>に</sup>能<sup>の</sup>三<sup>み</sup>人のみるらん  
題<sup>ず</sup>しら須<sup>す</sup> 讀<sup>ず</sup>人<sup>し</sup>ら須<sup>す</sup>  
以<sup>い</sup>裳<sup>も</sup>可<sup>か</sup>茂<sup>も</sup>さ支<sup>ち</sup>に本<sup>ほ</sup>不<sup>ふ</sup>らん橘<sup>の</sup>こじ万<sup>ま</sup>  
のく末<sup>ま</sup>のや万<sup>ま</sup>ふ支<sup>ち</sup>能<sup>の</sup>花<sup>か</sup>  
者<sup>は</sup>るさめに、本<sup>ほ</sup>へるいろも阿<sup>あ</sup>可<sup>か</sup>那<sup>な</sup>く爾<sup>に</sup>  
閑<sup>か</sup>さへなつ可<sup>か</sup>しやまぶきの花<sup>か</sup>  
やま不<sup>ふ</sup>支<sup>ち</sup>は惡<sup>あ</sup>や爾<sup>に</sup>那<sup>な</sup>さ支<sup>ち</sup>曾<sup>そ</sup>花<sup>か</sup>みむと  
うゑんきみ可<sup>か</sup>こよひこなくに  
よしの可<sup>か</sup>はの本<sup>ほ</sup>と利<sup>り</sup>に山<sup>やま</sup>振<sup>り</sup>の  
さ个<sup>こ</sup>利<sup>り</sup>ける乎<sup>や</sup>

躬 恒

貫 之

よしの可<sup>か</sup>はきしの山<sup>やま</sup>ふ支<sup>ち</sup>ふ久<sup>く</sup>可<sup>か</sup>世<sup>せ</sup>にそこの  
いろさへうつろひ二<sup>に</sup>个<sup>こ</sup>利<sup>り</sup>  
題<sup>ず</sup>しら須<sup>す</sup> よみびとしら須<sup>す</sup>  
か者<sup>は</sup>づ那<sup>な</sup>久<sup>く</sup>るで能<sup>の</sup>山<sup>やま</sup>不<sup>ふ</sup>支<sup>ち</sup>利<sup>り</sup>二<sup>に</sup>个<sup>こ</sup>利<sup>り</sup>  
阿<sup>あ</sup>者<sup>は</sup>万<sup>ま</sup>しも能<sup>の</sup>を者<sup>は</sup>那<sup>な</sup>のさ可<sup>か</sup>利<sup>り</sup>二<sup>に</sup>

此歌或人のい者くきよとも可と

春歌としてよめる

素性法師

おもふど知<sup>ち</sup>者<sup>は</sup>るの山<sup>やま</sup>べ爾<sup>に</sup>有<sup>ち</sup>地<sup>ぢ</sup>むれてそ  
こともしらぬ多<sup>た</sup>び年<sup>ね</sup>してし可<sup>か</sup>

於もふてふこと〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇もてとも

春のご久<sup>く</sup>過<sup>と</sup>事<sup>じ</sup>を讀<sup>よ</sup>る

躬 恒



悪徒さ遊美はる多知しよ利とし月  
乃意る可ごとくもおも本ゆる鉤  
やよひ爾鶯の聲の飛さしうせ  
ざ利个れ者

紀貫之

なきと无る者那しな个れ者う久  
悲須も以まはも能うくな利ぬべらな利  
やよひのつごも利可多爾山をこえ个  
个るに山河爾花のな可れ个る爾

清原深養父

者那のちるみづ能末爾とめくれ者  
やま爾はゝるもなく那り爾个利  
春を惜て讀る

在原元方

越しめどもとゞ末らなく爾春霞  
還る道爾したちぬと思者

寛平御時后宮の歌合爾

藤原興風

こゑ多々春鳴やうぐひ數非とせ爾二  
般と多爾可來春香八

やよひ農つごも利に者那つ三  
に罷个る女どもをみて

躬恒

とゞむべ支ものとはなし爾者可那く  
もちる花ごとに多久不心可  
三月晦日雨の不利个るに藤



花を利て人二つ可は寸とて

在原業平

ぬれつゝ楚志ゐて乎里つる年内爾  
春は今日（賀）可支利と於もへば

亭子院歌合爾春能者て

凡河内躬恒

今日耳と者那をおもはぬ時  
多爾も起事や數支花の可个可波

### 古今和歌集 弓第三

#### 夏歌

題不知 讀人しら須

わ可やどの池のふ知な三左支爾个利  
山郭公以つ可きな可無

此歌或人のい者く柿下人丸可な利

四月爾さ个る櫻乎

紀 利貞

悪は禮て布事をあま堂にやらじ  
とや春爾おくれて獨開藍

題不知 讀人しら須



さつ支待山ほと、支數打羽吹支今  
も鳴南去年能舊聲

五月こばな支も不利南郭公ま堂  
敷時の聲を聞者や  
伊 勢

さ徒支待花橘をの香を可げ者昔  
農人乃會で能可楚寸る  
讀人不知

以都能まに五月支ぬ羅无足引乃  
山郭公今會なく名留  
計左きな具以未堂、飛なる本

東、支數花橋爾屋どは可らな無  
於とは山をこ盈个ると支本と、

ぎ寸のなくをきして

お登は山今朝こえ久れ者保と、支  
數こ須ゑはる可爾以ま會な久那る  
紀 友 則

郭公能はじ免て鳴个るを支して  
素 性 法 師

本と、支數者つこゑ支个ばあ知支な  
求ぬしさだまらぬ戀せらる八堂  
寧樂の以會の可み農寺爾て

郭公の鳴をきして  
いその可見ふる支みやこのほと、支  
數こゑ者利可會む可しな利个れ  
題 不 知 讀 人 し ら 須



さみ堂れ爾なく保と、支寸心あらば  
毛のおもふ王れ爾聲な支可せそ  
奉登、支數名具こ衛き介ばあま堂  
あれ者猶うと万禮ぬ於もふ物柄  
郭公鳴聲聞者わ可れ爾志古里さへ所こひ志可利ける  
思出る常葉の山農保度、起數可  
良久れ奈る爾の不りで、ぞなく  
こ衛はしてな見だはみえぬ郭公  
わ可こ呂もで能悲づを可らな無  
あし飛支の耶末保登、ぎ春を利は  
へてたれ可万さるとねをのみ曾なく  
今更爾山に歸な時鳥聲のか支利は  
我屋戸爾なけ

三 國 町  
やよや待て山雀公鳥事づてむわ禮  
世中爾す三わびぬとよ  
寛平御時の后宮の能歌合爾  
紀 友 則  
さみ多禮爾鬼思居者ほと、起寸夜  
布可くな支ていづち行らん  
よやくら支みちやまどへる奉と、支  
數わ可やどをしもす支可て爾なく  
大江千里  
やど利世し花橘もかれなく爾など  
奉と、支須こゑ多えぬらん  
紀 貫 之



なつ能よ農不須可と寸れ者奉とゞぎ須  
那くひとこゑ爾あくるしのゝめ

九るゝ可とみれ者阿个ぬるなつ能よを阿  
可すとやなく山ほとゞぎ數

なつ山爾こひし支人やい利爾个んこゑ不利  
多てゝなく本とゞぎ數

去年之夏な支布るしてし奉とゞ  
ぎ數其可あらぬ可聲の可はらぬ

郭公の鳴を聞て

貫之

讀人しら須

さみ多れのそらもとゞる爾ほとゞぎ寸  
な爾をうしと可夜多々なくらん

佐ぶらひ爾さ个堂うべ个る佐い  
て爾を能こどもをめしてほと

登ゝ支數待歌讀と仰られ个  
る時爾 凡河内躬恒

山爾郭公のな支个るを聞て

貫之

ほとゞぎ寸人待山爾なく那る八わ禮う  
ちつけ爾こひまさるな理  
者やう寸三ける所爾郭公のな支



けるを支へて

壬生忠岑

無可しへや今も戀敷奉と支數古

里爾霜毛な支て來嵐

ほご支寸のな支けるを聞て

躬 恒

奉と支數王れとはなし爾卯花の

う起世中爾鳴王多る藍

蓮葉能露をみて

遍 照

はち須盤能二ご利に志万ぬころもてな

ど可はつゆをたまとあざむく

月おもしろ可里个る曉爾

清原深養父

なつ能よはま多よひな可ら阿个爾个利

雲能いづく爾月やど流らん

登な利よ利とこなつ能花を

こひ爾於こせた利けるをやら

躬 恒

ち利を谷爾すゑじとぞおもふさ

きしよ利妹とわ可ぬる常なつ能花

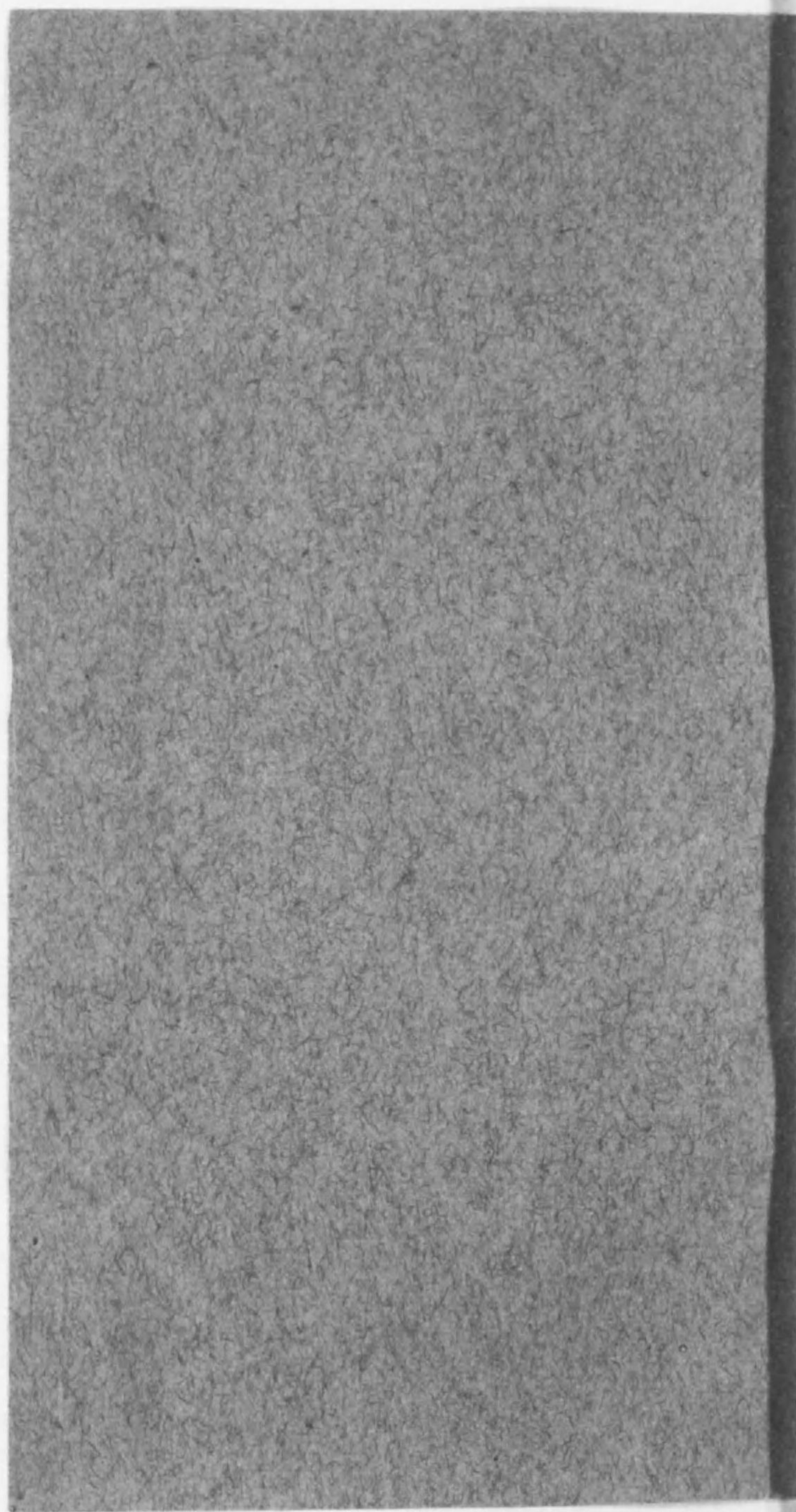
六月つごも利に讀る

躬 恒

夏與秋行替ふ虚のかよひちに

方へ涼支風や吹覽







昭和十年八月二十日印刷  
昭和十年八月廿五日發行  
定價金貳圓參拾錢

第九次配本  
(三)切筋

發行所  
東京市下谷區中根町七二  
武田墨彩堂  
電話掛號三五七番  
東京六〇五四八番

編輯者  
加名謙全集刊行會

代印者  
武田基一

發行人  
武田基一

印刷人  
黒川秀一



古今味音集局弟二



ふん

讀入るに



老々々、ひかんたるを九也まればこゝろ  
氣うらるればこゝろ世の心もゆる

まが

まがと、あまらるる志とあまらるる  
らばなるをあらはしむるに  
まがとあまらるるをあらはしむるに  
まがとあまらるるをあらはしむるに  
まがとあまらるるをあらはしむるに  
まがとあまらるるをあらはしむるに  
まがとあまらるるをあらはしむるに  
まがとあまらるるをあらはしむるに



うらさ... けんら花  
せらも... せら

僧正遍照 續々

惟高親王 号小野宮

けんら... せんら  
せんら... せんら

雲林院の櫻はちもさうすあつた

取均法師

おんら... せんら  
せんら... せんら

梅ののらもけのなよあつた

まね法師

せんら... せんら  
せんら... せんら



取均法師

七、くらまししあまの御供にあふれに  
おなははれしうらみあふまなま

あまの御供あまの御供あまの御供  
あまの御供あまの御供あまの御供

あまの御供

あまの御供あまの御供あまの御供

あまの御供あまの御供あまの御供

あまの御供

清原深養父

10通

あまの御供あまの御供あまの御供

あまの御供あまの御供あまの御供

あまの御供あまの御供あまの御供

あまの御供あまの御供あまの御供

あまの御供あまの御供あまの御供



ふらふらなまのくにきくさのふりよる  
わらわら  
典作固香

垂籠下まののくも志をね用ひ待  
櫻色うららひにこころ

はくさの志ののりてらま  
あま  
あま

ゆき雪の吹きさくら花とこころ

あなうのまゝ雪とあま

東宮れ雅院にて櫻花のしり

うらば水なうれさくら

菅野高世

あまのうらとさくらにふりて花のしり  
おらして水のあはとさくら

あまのうらとさくら  
あま



あはれなるはあはれなるをさるらねせとて花  
あはれとわれせとてさあはれとてあはれ

さくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくら

花

あはれなるはあはれなるをさるらねせとて花

あはれなるはあはれなるをさるらねせとて花

あはれなるはあはれなるをさるらねせとて花

あはれなるはあはれなるをさるらねせとて花

あはれなるはあはれなるをさるらねせとて花

あはれなるはあはれなるをさるらねせとて花

藤原好尚



老のまは花れあふりよをよびて  
心くろくわうくろくをよびて

比叡のやまに花を見ゆり

とゆり

世々

たまらうみくわうくろくをよびて  
比叡のやまに花を見ゆり

仁和寺の中納の御息所は家

あはれに

大伴

まのまののやまはあふりよをよびて  
ちのちのちのちのちのちのちのち

まのまののやま

世々

まのまののやまはあふりよをよびて  
まのまののやまはあふりよをよびて



寧樂帝后歌

あつた御心なすけしあまの都こそ  
つらばはうはらへてをたふさすらわ

まことのどく 侍

良岑宗貞

あまのまろは霞くも免くみまは  
あまのまろはあまのまろのまろ

寛平御時后宮合

まの性

花のあま今名壇殖しあまのま  
うらたふあまのまあまのま  
あまのまあまのまあまのま

あまのまあまのまあまのま  
あまのまあまのまあまのま



春のさきよきとて

春のさきよき

みちのちのさきよきとて  
春のさきよき

雲林院の御子の許し

北山乃とて

まづ法師

せうとて

さきよきとて

けうのさきよき

伊人

伊人さきよき

さきよき

さきよき

伊人

さきよき

北のさきよき



うきをいぢりてはしるのては  
のちのしはるゝては  
あはのよのよのちのちのち  
ひはまをししにちのちのち  
まひとしぬれぬのちのちのち  
なつてをいぢりてはしるの

寛平御時三合

藤原興風

七はさげちくせにありなれと  
いふは春をうらみ老をたら  
けつていんきられちるはま  
新はまれちるのちのちのち  
在るえち

かまはしほれも  
あはれはるの  
か  
の



月之あな花とひらにまほつ木  
才大慮を法へまほせまほつ木  
まほつ木あまをまほつ木

乃らね

ほれみれまほつ木  
まほつ木あまをまほつ木  
まほつ木あまをまほつ木

題

情人ふた

まほつ木あまをまほつ木  
まほつ木あまをまほつ木  
まほつ木あまをまほつ木  
まほつ木あまをまほつ木  
まほつ木あまをまほつ木

藤原常根

まほつ木あまをまほつ木  
まほつ木あまをまほつ木  
まほつ木あまをまほつ木  
まほつ木あまをまほつ木  
まほつ木あまをまほつ木



仁和寺中ね御息所の家ニテ  
とをきんとしつゝ時信

藤原後蔭

熨在り也

老れのらる事やわもいあるらん  
美さるあふれうらむすのこ

世のなほ

まはる

古了らにたのほさふおはれを  
作らばせしうらむあなも

世のなほ

はら

新しなまをいふもなほ  
のこるをるは



題名

讀人

駒並下におまにひむ古里のは

らとの三年花はちりて

是うお人のいさく飛たぬたの

らりていさくちりていさくちりて

我のいさくちりていさくちりて

小野

花の色はうらまにけりていさくちりて

うらまにけりていさくちりて

仁和御時中將の御息所の家

号

小野

惜とわらふらんあはれにやめられうす  
ちりていさくちりていさくちりて







吹れと谷の水と たちまちをばなを  
これの花をさす

志賀よわをさす女よしの華に

いふくし藤の花にめもたに

わがこころをさすは 後くもた

お

僧正遍照

何れにみくかきん人ニ多此の花

おのまらけははるはをさす

お藤花のささるは人の花

よほりみくしを

お

わがよにせさるはをさすは

あつらふは人の花をさす



料 づい

後 づい

一 ちの 我 さいになんし 橋のうら  
の さいの ずいすれ 花

ちんてき になん ちんてき あり あり

ちんてき になん ちんてき あり

ちんてき になん ちんてき あり

ちんてき になん ちんてき あり

よーの けの ちんてき あり

ちんてき になん

あり

よーの けの ちんてき あり

あり

あり



かえりゆくわがねほふあはれもさう  
はなれしはなれしはなれしはなれし  
はなれしはなれしはなれしはなれし

まはれしはなれし

かえりゆくわがねほふあはれもさう  
はなれしはなれしはなれしはなれし  
はなれしはなれしはなれしはなれし

春のそとをさう

まはれし

かえりゆくわがねほふあはれもさう  
はなれしはなれしはなれしはなれし  
はなれしはなれしはなれしはなれし

かえりゆくわがねほふあはれもさう

はなれしはなれし

まはれし



春の光景を  
 写すに  
 花の咲き  
 始まる  
 頃  
 光景が  
 変わ  
 る  
 様子  
 を  
 写  
 した  
 こと  
 が  
 あり  
 ます  
 ため  
 重複  
 撮影  
 とな  
 った  
 こと  
 を  
 承  
 知  
 いた  
 して  
 下さ  
 り  
 ませ  
 ん



なまじりくもゆたかきれきう  
あはれもなまじりくもなまじりく

かまひのしるしよきまじりく  
なまじりくはなまじりくはなまじりく

法原深志文

まじりくはなまじりくはなまじりく

なまじりくはなまじりくはなまじりく

まじりくはなまじりくはなまじりく

法原深志文

なまじりくはなまじりくはなまじりく  
なまじりくはなまじりくはなまじりく

法原深志文

藤原深志文



こころをうつらうつらと  
思ふに、

かたじけなく、  
にやうな女よ、

秋夜

しづかに、  
しづかに、

三月梅の  
花を、

春夜

あつた、  
あつた、

あつた、



江戸の歌

今も何となく  
あはれの花のうきは



古今味語集阿事三

夏三

題字

清人

わんまの池のふらたうこまうまわ  
山郭とつらきなせ

此方去人のいしこ孫下人九

四月よとて橋

孔利貞

こけりた名事をあまうまにや  
と平春をたれくお用藍

道

清人



さうして徳心はもとより教打羽以て今  
と云ふ年々々々

伊勢

五月にはなましりふ南郭と書きて  
数時の遊をも同く也

懐人の心

さして徳心はもとより教打羽以て今  
と云ふ年々々々  
懐人の心  
五月にはなましりふ南郭と書きて  
数時の遊をも同く也  
伊勢  
さうして徳心はもとより教打羽以て今  
と云ふ年々々々



おははしるゝいふらゝるゝもよぢ  
よすのたゝもさゝり

此友

おははしるゝいふらゝるゝもよぢ  
おははしるゝいふらゝるゝもよぢ

おははしるゝいふらゝるゝもよぢ

書村法舟

おははしるゝいふらゝるゝもよぢ

おははしるゝいふらゝるゝもよぢ

おははしるゝいふらゝるゝもよぢ

おははしるゝいふらゝるゝもよぢ

おははしるゝいふらゝるゝもよぢ

おははしるゝいふらゝるゝもよぢ

おははしるゝいふらゝるゝもよぢ

おははしるゝいふらゝるゝもよぢ



守に... 名... 体... 物...

物... 物... 物...

思出... 常... 業... 心... 体... 心...

良... 心... 心... 心...

心... 心... 心... 心...

心... 心... 心... 心...

心... 心... 心... 心...

心... 心... 心... 心...

心... 心... 心... 心...

心... 心... 心... 心...

三國町

心... 心... 心... 心...

心... 心... 心... 心...



寛平御時の忘言の事

孔友利

さきより御座居るはしり守  
しやうと云ふはしり守  
あつたはしり守  
あつたはしり守  
あつたはしり守

大はしり

あつたはしり守

あつたはしり守

あつたはしり守

あつたはしり守

あつたはしり守

あつたはしり守

あつたはしり守

あつたはしり守



よ〜な〜な〜き〜

後へ〜

去年は夏なが〜多〜し〜と〜  
き〜ぬ〜其〜の〜あ〜ら〜わ〜の〜歌〜の〜は〜ら〜ぬ

郭の鳴を聞く

書

大みづれのそ〜し〜と〜る〜は〜ら〜ぬ〜  
か〜ら〜ぬ〜の〜東〜の〜な〜ら〜ぬ

は〜ら〜ぬ〜と〜さ〜ら〜ぬ〜と〜ら〜ぬ〜は〜ら〜ぬ〜  
と〜ら〜ぬ〜と〜さ〜ら〜ぬ〜と〜ら〜ぬ〜は〜ら〜ぬ〜  
は〜ら〜ぬ〜と〜さ〜ら〜ぬ〜と〜ら〜ぬ〜は〜ら〜ぬ〜

凡に内証

や〜と〜さ〜ら〜ぬ〜と〜ら〜ぬ〜は〜ら〜ぬ〜  
外〜に〜た〜ら〜ぬ〜と〜さ〜ら〜ぬ〜と〜ら〜ぬ〜  
この郭のな〜ら〜ぬ〜と〜さ〜ら〜ぬ〜と〜ら〜ぬ〜  
き〜り



ほろこゝ子へ 待しよたしほくわび  
らけりいふよきるおれ

たやうすけり 所歌のた  
けり

すくもふ 念ふとて教た  
る小積し なるし 東丸

ほと、すのたけりす

紅炬

うらもて 教たはたなり 亦流の  
うらもて ちこそら 花

花葉れ 花をうり  
花

けりいふに ころわいりなり  
けりいふに ころわいりなり  
りけりいり ころわいりなり

花葉れ 花をうり

たよよは ころわいりなり



書みつゝ一月を流しん

やがてあけつゝなほなほ花を  
みよ木にやたけけをやら

花

ちのを谷に下りてとや井に  
とよよ姉をわねる常たれ花

花月をよよに流し

花

夏を飾りて空のなほ  
方へ涼を風や吹流



301  
10

昭和十年八月二十日印刷 定價金貳圓參拾錢  
昭和十年八月廿五日發行  
東京市下谷區中野町七二番地  
發行所 武田圖書公司  
代印者 武田圖書公司  
印刷人 川秀一  
東京市下谷區中野町七二番地  
電話 三三三七  
電報掛號 六〇五四八



終